

子不語の僵尸説話の創作性

はじめに

一九八〇年代のなかばころ、香港映畫『靈幻道士』シリーズがヒットし、續けて臺灣ドラマ『幽幻道士』がテレビで放映されて以來、「キョンシー」という存在ないしは言葉がひろく知られるようになった。

子供用のテレビ番組で、「キョンシーダンス」やら「キョンシー體操」などというもので發明されるに至って、「キョンシー」が、なにやら親しむべき存在であるかの如きものになつてしまつたのは、いささか困惑を禁じ得ない。

しかし、中國固有の古典的妖怪である「僵尸・僵屍」が、特別な説明を必要とせずに、「あのキョンシー」というだけで、さして正確ではないものの、さほど見當違いではないイメージを共有できるという意味では、映畫・テレビドラマによる「キョンシー」像の普及、或いは市民權？ の獲得に感謝すべきなの

かも知れない。

「僵尸」には大きく、死後間もないものと、死後歳を経たものとに區別できる。停柩・淺厝という風習の生んだ、極めて中國的妖怪である。

死後間もないものは、死後硬直前後の關節や筋肉の動きをオパーに語り傳えたものであらうと言われている。

大多數の死體が、腐朽し白骨化していくにもかかわらず、例外的に腐朽せずミイラ化する死體がある。すると例外であるが故に凡百の死體とは違つてなにか特殊な崇る力を持つと考えたのが、死後歳を経た「僵尸」なのであらう。人を追ひ、爪を立てて襲ひ、あるいは人の血を飲み、果ては空を飛び幼兒を捕らえて食べる。

先行研究⁽¹⁾に、「中國の幽鬼妖怪には、あまり怖いと思ふようなのは多くはないが、この僵屍だけはその形貌行動ともに凶厲無比で、迫力のあること妖怪の秀逸といふことができる」とある。

中 野 清

しかし「僵尸」をここまで「凶厲無比なるもの」に仕立て上げたのは、實は『子不語』（『新齊諧』・『續新齊諧』）なのではないかと筆者は考えている。

これから取り上げる、ディテイルまで描き込まれた「僵尸」像が、『子不語』以前にあったであろうか。

悪く言えば思いつきだが、また一方では性靈の發露の所産と言うこともできる、サブストーリーや伏線を追加していく手法がさらなるリアルな恐怖を生む仕組みをみていこうと思う。

『子不語』（『新齊諧』・『續新齊諧』）に收録された「僵尸説話」と考えられるものには、以下の二十三則がある。

- ①『秦中墓道』 『子不語』卷二。
- ②『畫工畫僵尸』 『子不語』卷五。
- ③『石門尸怪』 『子不語』卷五。
- ④『批僵尸頰』 『子不語』卷八。
- ⑤『飛僵』 『子不語』卷十二。
- ⑥『兩僵尸野合』 『子不語』卷十二。
- ⑦『僵尸手執元寶』 『子不語』卷十二。
- ⑧『僵尸求食』 『子不語』卷十三。
- ⑨『僵尸貪財受累』 『子不語』卷十三。
- ⑩『牛僵尸』 『子不語』卷十四。
- ⑪『僵尸抱韋駄』 『子不語』卷二十一。
- ⑫『鬼吹頭彎』 『子不語』卷二十三。

- ⑬『僵尸夜肥晝瘦』 『子不語』卷二十四。
- ⑭『扒』 『續新齊諧』卷三
- ⑮『早魃有三種』 『續新齊諧』卷三
- ⑯『僵尸拒賊』 『續新齊諧』卷四
- ⑰『乾虎子』 『續新齊諧』卷四
- ⑱『屍奔』 『續新齊諧』卷五
- ⑲『飛僵』（題は同じだが④とは別物） 『續新齊諧』卷五。
- ⑳『僵尸貪財』 『續新齊諧』卷六
- ㉑『屍變』 『續新齊諧』卷八
- ㉒『僵尸挾人棗核可治』 『續新齊諧』卷八
- ㉓『僵尸』 『續新齊諧』卷十

『僵尸説話』が多く書かれた時期には、ふたつのピークがある。『子不語』卷十二から十四までと、『續新齊諧』卷三から六までである。

今回取り上げたいのは、『子不語』卷十二から十四まで、通番でいえば、⑤から⑩までである。

どの程度加工があるか、或いはほぼ創作かは、この六則を検討することによって、かなり明らかにできると考えている。

一、加工がされていない例

- ⑦『僵尸手執元寶』⁽²⁾

雍正九年の冬、西北に地震あり。山西介休縣の某村の地里ばかり許陷る。未だ坑を成さざる者有り、居民掘りてこれを視るに、一家仇姓の者全家俱に在り。屍は僵して腐らず、一切の什物器皿は完好なること初めの如し。主人方に天平を持し銀を兌せんとし、右手に猶ほ一元寶を執る。把握すること甚だ牢なり。

雍正九年の冬に西北地方で地震があり、山西省介給縣の某村の地面が一里ばかりも陥没した。完全に埋まっている所があったので住民が掘ってみると、仇という姓の一家が全員一緒に見つかった。死體はミイラ化して腐らず、家財道具もそのままであった。主人はちょうど天秤を持って銀の兩替をしようとしていたようで、右手には元寶銀を一つ持ち、固く握りしめていた、というのである。

まるで新聞記事のように余計なことはなにひとつ書いていない。これは傳聞を記録しただけで、加工を加えていないものの代表と言えるであろう。

「金融資本家」が多く輩出した山西省だけに、某村というレベルの土地にも、兩替屋がいたというのは、妙にリアリティーがある。

二、多少の加工が見られる例

⑩『牛僵屍』⁽³⁾

子不語の僵尸説話の創作性（中野）

江寧の銅井村の人一牝牛を畜ふ。十餘年に犢凡そ二十八口を生む。主人頗る其の利を得たり。牛老いて、耕す能はず、牛を宰る者咸ほふなこれを買ふを請ふ。主人忍びずして、童を遣はして喂養せしめ、其の自ら斃るるを俟ちて、乃ち土中に掩埋す。是の夜、門外に擊撞の聲有るを聞く。是の如きこと夕を連ぬ。初めは即ち此の牛なるを意はず。月餘にして、祟りを爲すこと更に甚し。吼聲蹄響を聞く。是に於て一村の人皆な此の牛の怪を作すを疑へば、掘りてこれを驗ぶ。牛屍は壞れず、兩目は閃閃として生くるが如く、四蹄の爪に皆な稻芒あり、夜間土を破りて出づる者に似たり。主人大に怒り、刀を取りて四蹄を斷ち、並びて其の腹を剖き、糞穢を以てこれに沃灌す。嗣後寂然たり。再び土を啓きてこれを視るに、牛朽腐せり。

南京の近郊で、牛が死後「僵尸」になって祟ったという珍しい話だが、「牛僵尸」が如何に暴れ回ったかという細かい描寫がないので、ほぼ傳聞の記録と見ていいであろう。

加工の跡があるとすれば、「十餘年に犢凡そ二十八口を生む。主人頗る其の利を得たり」という部分の二十八という數字とか、「牛老いて、耕す能はず、牛を宰る者咸なこれを買ふ請ふ。主人忍びずして、童を遣はして喂養せしめ、其の自ら斃るるを俟ちて、乃ち土中に掩埋す」という部分の、主人としては充分に感謝の意を表している、という部分が、祟りの後の主人の怒

りの強さの伏線になってゐる點などである。

「四蹄の爪に皆な稻芒あり、夜間土を破りて出づる者に似たり」という部分も、蹄に稻の穂がはさまっているという妙なりアルさは、加工といえないこともないだろう。

「主人大に怒り、刀を取りて四蹄を斷ち、竝びて其の腹を剖き、糞穢を以てこれに沃瀦す」の「糞穢を以てこれに沃瀦す」と念入りに壓勝をする部分も、或いは加工かも知れないが、なんととっても、リアルな「牛僵尸」の描寫が無い點が物足らない。

三、出來の良い說話をほぼ聞いたまま記したであらう例

⑤『飛僵』⁽⁴⁾

潁州の蔣太守直隸の安州に在りて一老翁に遇ふ。兩手時時顫動し、鈴を搖するの狀を作す。其の故を叩くに、曰く、余が家は某村に住む。村居は僅に數十戸。山中に一僵屍を出し、能く空中に飛行し、人の小兒を食ふ。毎に日未だ落ちざるに、群相ひ戒めて戸を閉ぢ兒を匿すも、猶ほ往往にして攫はる。村人其の穴を探るも、深さ測る可からざれば、敢て犯す者無し。城中の某道士に法術有るを聞き、因りて金帛を糾積して、往きて怪を捉へんと求む。道士許諾し、日を擇びて村中に至り法壇を設立し、衆人に謂ひて曰く、我が法は能く天羅地網

を布き、飛び去るを得ざらしむるも、亦た爾が輩兵械を持し相ひ助くるを須め、尤も一膽大人の其の穴に入るを需む、と。衆人敢へて對ふる莫きも、余聲に應じて出でて問ふ、何ぞ差し遣はさるる、と。法師曰く、凡そ僵屍は最も鈴鐺の聲を怕る。爾夜間に到り其の飛び出づるを伺ひ、即ち穴中に入り兩大鈴を持しこれを搖り、手住むる可からず。若し稍も息まば、則ち屍穴に入り、爾傷を受けん、と。漏將に下らんとするに、法師壇に登り法を作す。余因りて雙鈴を握り、屍の飛び出づるを候ち、力を盡して亂搖すること、手は雨の點ずるが如くし、敢て小^{いさ}かも住めず。屍穴門に到れば、果して猙獰として怒視するも、鈴の聲の瑯瑯たるを聞けば、逡巡して敢て入らず。前面は人に圍住せられ、又た逃るる處無ければ、乃ち手を奮ひ臂を張り村人と格鬥す。天將に明けんとするに至り、地に仆れて倒る。衆火を擧げてこれを焚く。余時に穴中在りて、未だ知らざるなり。猶ほ鈴を搖りて敢て停めざること故の如し。日の中するに至り、衆大に呼べば、余始めて出づ。而して兩手動搖して止まず。遂に今に至るも疾と成れり、と。潁州の蔣太守が直隸の安州で一人の老人と出會った。

その老人の話が延々と續く。
手が震える病氣を得た原因が、若いころの「僵尸」退治にあるという、一人稱獨白體の、謂わば、ホラ吹き中風老人が作った、若いころの武勇傳である。

「僵尸」の描寫は、ほとんど無いといってよい。

「屍穴門に到れば、果して猙獰として怒視するも」の「猙獰」などは猫寫とはいえない。

潁州の蔣太守は言うまでもなく高官である。當然、袁枚の知人であろう。その蔣太守から聞いた話を、ほぼそのまま記したものであろう。

考えられるのは、すでに出来上がった説話、「手が震える老人の若き日の武勇傳」があつて、それを蔣太守が、袁枚に話した、ということなのだろう。

四、創作であらう例

⑧『僵尸求食』⁽⁵⁾

武林の錢塘門内に更樓有り。更夫を僱ひて柝を撃たしめ、表裡に巡邏せしむ。大衆賞を斂めてこれを爲す、由來は舊し。康熙五十六年夏、更夫任三なる者巷外を巡り、路に小廟を過ぐるに、毎に二更に至り柝の聲を聞けば、則ち一人有り廟中從り出で、踉蹌として捷走す。漏五に下れば、則ち柝の聲に先んじて廟に入る。是の如くすること屢なり。任三廟中の僧に邪約有らんと疑ひ、將にこれを伺ひて酒肉を詐るの計を爲さんとす。次夕、月明きこと晝の如く、其人の面は枯黒にして臘の如きを見る。目眶は深く陷み、兩肩に銀錠を掛けて行き、窓窻として聲有り、出入すること前の如し。任三僵尸爲

子不語の僵尸説話の創作性（中野）

るを知り、山門の内に停まる舊櫬ありて、塵を積むこと寸許なるに因り、これを僧人に詢ふ。云ふ、其れ師祖の時にして誰何氏の寄する所の厝なるを知らざるなり、と。儕輩と語りてこれに及ぶに、其の中の黠き者曰く、吾鬼は赤豆鐵屑と米子を畏ると聞く。此の三物の升許を備へ、其の棺を破りて出づるを伺ひ、潜に取りて以て棺の四週を繞れば、則ち彼は入る能はざらん、と。任其の言の如くせんとし、三物購買をし、夜の二更を待つに、屍復た出づ。其の去ること遠きを伺ひ、燈を攜へ入りて視るに、棺の後の方板一塊、俗語に謂ふ所の和頭なる者、已に掀られて地に在り、中は空空として有る所無きを見る。乃ち三物を取りて棺を繞りて密に灑ぐ。事畢りて逕ちに歸り更樓上に臥す。五更に至り、聲を厲まして任三爺と呼ぶ者有り。任誰爲るを問ふに、曰く、我は山門内の長へに眠る者なり。子孫無く、久く血食するを得ず。故に外營に出でて求むるに腹の餒を救ふを以てするも、今爾の壓する所と爲り、棺に入る能はず。吾れ其れ死せん。急ぎ起きて赤豆鐵屑を將つてこれを拂ひ去る可し、と。任懼れて敢て答へず。又た呼びて曰く、我爾と何の仇がある。何をか苦みて此の虐を爲すか、と。任念へらく、彼が與に圍を解くの後、彼我を殺して後に入らば、何を以てかこれを禦がん、と。終に答へず。雞初めて鳴けば、鬼哀懇し、繼ぎて詈罵を以てするも、これを久しうして寂然たり。明くる日、樓下に過ぎる

者屍の僵臥する有るを見て、乃ち衆に告げて官に鳴し、屍を以てこれを棺に還し火もてこれを焚く。一方寧きを得たり。小廟から、毎晩決まって二更に外出し、五更に歸るものがある。

そこで更夫の任三が、廟中の僧がなにか悪いことをしにでかけるのであらうと疑い、探りを入れて酒や肉をせびり取らう考える。

しかし次の晩、明るい月光のもとで見ると僵尸である。

兩肩に紙製の銀錠を掛けているので、ガサガサと音を立てる。山門の中に放置されている棺の主だと思い、僧に尋ねるが古いことなのでわからないという。

仲間内の賢い男が、鬼の類は赤豆と鐵屑と米を怖がるから、この三つを少しばかり準備し、出掛けたすきに棺の周りにまいておけば、やつは棺の中に戻れないはずだという。

そのとおりにして、すぐに歸って更樓で寝ていると、五更になって「任三の旦那」と大聲で呼ぶものがある。

任が「誰か」とたずねると、「山門の中で眠る者です。子孫が無いので、お供えもあげてもらえず。外に出てで飢えをいやしていたのだが、今あなたに壓勝されて、棺に戻れない。このままでは死ぬから、急いで片付けてくれ」と言う。

任が怖がって答えずにいと、泣き落としにかかる。

任は、「彼のために圍みを解いたら、彼が俺を殺して棺に入

るだらう」と考え、答えずにいと、鶏が鳴きだし、哀願から罵詈になり、しばらくして靜かになった。

明けてから樓下を通るものが、僵屍が横たわっているのを見て、通報し、屍を棺に戻して焼き、怪は絶えた。

「武林の更夫もの」というジャンルを作りたくなるほど、武林（杭州）の更夫が主人公になる、三人稱小説はすぐれたものが見られる。⁽⁶⁾

更夫は、初更から五更までの、時を知らせて歩く、謂わば夜勤専門の仕事なので、怪とであう機会が多く、三人稱小説の主役として恰好の存在なのであらう。

「更夫を僱ひて柝を撃たしめ、表裡に巡邏せしむ。大衆費を斂めてこれを爲す、由來は舊し」という、お國自慢から始まる。

「廟中の僧がなにか悪いことをしにでかけるのであらうと疑い、探りを入れて酒や肉をせびり取らう考える」という任三の小役人根性が描かれる。

明るい月光のもとでの、「其人の面は枯黒にして臘の如きを見る。目眶は深く陷み」という面貌の猫寫はみごとである。

「兩肩に銀錠を掛けて行き、窓窰として聲有り」という部分は、滑稽なりアルさである。

紙製の銀錠（紙錠）は元寶銀を型取り錫箔を貼ったもので、紙錢よりやや贅澤なもの。武林の近くの紹興が産地であることもよりリアルさを増す。

そして、「我は山門内の長へに眠る者なり。子孫無く、久く血食するを得ず。故に外營に出でて求むるに腹の餓ゑを救ふを以てするも、今爾の魘する所と爲り、棺に入る能はず。吾れ其れ死せん。急ぎ起きて赤豆鐵屑を將つてこれを拂ひ去る可し」というセリフのユーモラスな點である。

食欲に負けた僵尸が、夜ごとに外食に行くというのである。そして、一度死んで僵尸になったものが、棺に戻れなければ死ぬというナンセンス。

また、「彼が與に團を解くの後、彼我を殺して後に入らば、何を以てかこれを禦がん」と考える任三の、臆病なのに小ずるい性格が見事に描かれている。

僧の弱みを見つけてゆするうとしたり、僵尸の心理を讀んだり、かなり算的だが、僵尸に聲を掛けられると、答えることもできない弱さと、僵尸になっても食欲に負ける弱さが、描き切れていると言える。

同じく、創作であろう例として、

⑨『僵尸貪財受累』

紹興の王生某は、饑を食ひて年有り。村中の富家これを延きて師と爲すも、屋宇の湫隘なるに因り、適たま相距たること里許に新室の售るを求むる者有れば、遂に買ひて居らしめ、且つ曰く、家中の摒擋は未だ盡さざれば、學徒と館童輩とは

子不語の僵尸説話の創作性（中野）

明晨に館進ましめん。先生一夜獨り眠るに、能く懼る無きかと。王は膽の壯なるを自負す。且つ新室なり。何の畏るることかこれ有らん。乃ち童に命じて茗具を攜へしめ引きて書齋に至る。王周く室内を視畢り、復た門前に至り椅を徙す。時に已に夜にして、月色大に明く、山下に燭火熒熒たるを見る。趨き往きてこれを視るに、光は一の白木の棺中より出づ。王念へらく、此れ鬼の磷なるか。色宜しく碧なるべし。而して燄微に赤を帶ぶ。金銀の氣爲る無きを得んや。憶ふに智囊の載する所に、胡人數輩の凶服して櫬を輿ぎて城外に藁葬する者有り。捕人これを跡くるに、櫬中は皆な黃白なり、と。此の棺も乃ち是に類する母からん。幸に人無ければ、攫ひて取る可きなり。遂に石塊を取りて撃ちて其の釘を去り、棺の後従り其の蓋を卸せば、則ち赫然として一屍あり。面は青紫にして腹は膨亨し、麻冠にして草履なり。越の俗に、凡そ父母堂に在して子先に亡するは、例此れを以て殮す、と。王愕然として退縮すれば、一縮する毎に則ち屍は一躍す。再び縮するに屍蹶然として起つ。王力を盡して狂奔するも、屍後自りこれを追ふ。王戸にいらりて樓に登り、門を閉じ鍵を下す。喘息甫めて定まり、屍は已に去るかと疑ひ、窗を開きてこれを視る。窗啓けば屍は首を昂げて大に喜び、外従り躍り入らんとして、連ねて門を叩くも、入るを得ず。忽ち大聲もて悲呼すれば、三呼して諸もろの門洞開く。これを啓く者有るが若

し。遂に樓に登る。王奈何ともする無く、木棍を持してこれ
を待つ。屍甞めて上れば、即ち撃つに棍を以てす。其の肩に
中りて、掛くる所の銀錠散りて地に落つ。屍俯して拾ひ取ら
んとす。王其の僂僂する時に趁じ、力を盡してこれを推せば、
屍樓下に滾す。旋ぎて雞の啼くを聞く。此れ従り寂として聲
の響く無し。明くる日これを視るに、屍は腿骨を跌傷し、地
に横臥す。遂に衆人を召し^に扞ひてこれを焚く。王歎じて曰く、
我貪の故を以て、屍招きて樓に上らしむ。屍は貪の故を以て、
火もて焼き燬たる。鬼すら尚ほ貪なる可からず、而して況は
んや人に於てをや、と。

紹興の王某という書生は、長年貧で碌なものが食えない。

村の金持ちが家庭教師に雇ってくれたが、家が狭いので、近
所に新しい家を買って住まわせてくれた。

「家の中の造作がまだなので、學生と兒童は、明朝行かせる。
先生一晚一人で怖くありませんか」と言う。

王は膽が太いと自負していたし、まして新築である。何も怖
がることはないのです、お茶の道具を用意させて、書齋に行った。
門の前に椅子を出すと、もう夜になっていた。月が明るく、山
の下に火が明々と見える。見に行くと、棺の中から火が出てい
る。

王は「これが鬼の磷だったら、色は碧いはずだが、火がかす
かに赤いのは、金銀の氣があるからだろう。たしか智囊に『胡

人が數人喪服を着て棺をかつぎ城外に藁をかけて葬むった。目
明かしが跡をつけ、あばいてみたら棺の中は金銀だった』とい
う話がある。この棺もそうかも知れない。幸に人もいないので、
かささらってやろう』と考え、棺の蓋をはずすと、僵尸が入っ
ている。

青紫色の顔で腹は膨張し、麻冠に草履ばきである。浙江の風
俗で、父母在世中に子が先に死ぬとこのよう葬るのだ。

王がびっくりして後戻りすると、僵尸は跳んで進む。また戻
ると僵尸はガバツと立ち上がる。王は全力で逃走するが、僵尸
は追ってくる。王が二階にのぼり、ドアに鍵を掛ける。

息が静まって、僵尸はもういないのかと思い、窗を開けると、
僵尸は大喜びして、跳びこんで来ようとする。突然僵尸が大聲
三回叫ぶ。するとすべてのドアが開き、とうとう僵尸が二階に
登ってくる。王はしょうがなく棍棒で肩を撃つと、肩に掛けた
銀錠が床に落ちる。僵尸拾ひ取ろうと背を丸めたところを、力
まかせに押し落とす。すぐに鶏が鳴き、静寂が訪れる。夜が明
けてみると、僵尸は腿の骨を折り横たわっていた。そこでこ
れを焼いた。王戒めの名言を吐く。

こんどは金錢欲の話である。

金錢欲で棺をあばく書生と、紙製の銀錠を惜しんで體勢を崩
す僵尸という、貪欲は身を滅ぼす話。

貧が續いたが故に、貪に負け、「此れ鬼の磷なるか。色宜し

く碧なるべし。而して燄微に赤を帶ふ。金銀氣の爲る無きを得んや。憶ふに智囊の載する所に、胡人數輩の凶服して櫬を輿ぎて城外に藁葬する者有り。捕人これを跡くるに、櫬中は皆な黄白なり、と。此の棺も乃ち是に類する母からん。幸に人無ければ、攫ひて取る可きなり」という、王の心理描寫が素晴らしい。こままでの心理描寫は、文言小説ではまさに稀有なものである。そして、やはり僵尸の面貌の猫寫。「則ち赫然として一屍あり。面は青紫にして腹は膨亨し、麻冠にして草履なり。越の俗に、凡そ父母堂に在して子先に亡するは、例此れを以て殮す」とある部分。越の俗にの部分がリアリティを増す。

最後に、創作以外に考えられない例。

⑥『兩僵尸野合』

壯士某なる有り。湖廣に客たりて、獨り古寺居る。一夕、月色甚だ佳ければ、門外に散步するに、樹林の中に隱隱として唐巾を戴し飄然として來る者有るを見る。其の鬼爲るを疑ふも、旋ぎて松林の最も密なる中に至り、一古墓に入れば、心に僵尸爲るを知る。素より僵尸棺上の蓋を失へば便ち祟りを作す能はざるを聞けば、次の夜、先づ樹林中に匿れ、屍の出づるを伺ひ、將に竊かに其の蓋を取らんとす。二更の後、屍果して出で、往く所有るに似たり。これを尾くるに、一大宅の門外に至る。其の上樓の窗中に先に紅衣の婦人有り、白練一條を擲下しこれを牽引す。屍攀援して上り、絮語の聲を

子不語の僵尸説話の創作性（中野）

作すも、甚しくは了了ならず。壯士先に回り、其の棺蓋を竊みてこれを藏し、仍りて松の深き處に伏す。夜將に闌ならんとするに、屍匆匆として還り、棺の蓋を失ふを見て、窘しむこと甚しく、遍く覓むること良や久しうし、仍りて原の路に従ひて踉蹌として奔り去る。再びこれを尾くるに、樓の下に至り且つ躍り且つ鳴きて、啗啗として聲有り。樓上の婦も亦た相ひ對して啗啗たるも、手を以て搖り拒む。其の應に再び至るべからざる者を訝しむに似たり。雞忽ち鳴くに、屍路側に倒る。明くる早、行人盡く至り、各おの大に駭く。同に樓の下に往きこれを訪ふに、乃ち周姓の祠堂なり。樓に一柩を停む。女の僵尸ありて、亦た棺外に臥す。衆人僵尸野合の怪爲るを知り、乃ち屍を一處に合してこれを焚く。

某壯士が湖廣に旅をして、僵尸を見かけ跡をつけると、大邸宅の二階の紅衣の女性と密會していた。戻って棺の蓋を隠す。歸ってきた僵尸は、蓋を探し、見つからないので大邸宅に戻るが、女性に拒まれる。結果、雙方ともに時間切れで倒れる。これは僵尸の不倫話という、性欲の話である。

女僵尸が男を誘惑する話は多いし、その逆も無くはない。しかし、僵尸同士の不倫という、そもそも題材からして、他の誰もが考え得ない話であるから、これは創作以外にないであろう。少なくとも文章化するものは、他にはないはずだ。

この話は湖廣という袁枚にはなじみのない土地が舞臺になっ

ている爲か、前半には特にすぐれた猫寫はない。

しかし、**僵尸**（男）が、棺の蓋が見つからず、大邸宅に戻ったときの、「樓の下に至り且つ躍り且つ鳴きて、啞啞として聲有り。樓上の婦も亦た相ひ對して啞啞たるも、手を以て搖り拒む。其の應に再び至るべからざる者を訝しむに似たり」部分は、拒む女のエゴイズムを、さりげなく描いていて、人の業も性も知りつくした袁枚でなければ書けない作品である。

以上、傳聞の記録から、創作に至る過程にいささか検討を加えたが、これから最晩年（『續新齊諧』）にかけての検討は、稿を改めることとする。

【注】

（1） 澤田瑞穂『鬼趣談義』。中央公論社、1998年3月。 3

30頁。

（2） 原文は以下のとおり。

雍正九年冬、西北地震。山西介休縣某村地陷里許。有未成坑者、居民掘視之、一家仇姓者全家俱在。屍僵不腐、一切什物器皿完好如初。主人方持天平兌銀、右手猶執一元寶。把握甚牢。

『僵尸手執元寶』『子不語』卷十二

（3） 原文は以下のとおり。

江寧銅井村人畜一牝牛。十餘年生犢凡二十八口。主人頗得其利。牛老、不能耕、宰牛者咸請買之。主人不忍、遣童喂養、俟其自斃、乃掩埋土中。是夜、聞門外有擊撞聲。如是者連夕。

初不意即此牛。月餘、爲祟更甚。聞吼聲蹄響。於是一村之人皆疑此牛作怪、掘驗之。牛屍不壞、兩目閃閃如生、四蹄爪皆有稻芒、似夜間破土而出者。主人大怒、取刀斷四蹄、竝剖其腹、以糞穢沃灌之。嗣後寂然。再啓土視之、牛朽腐矣。

『牛僵尸』『子不語』卷十四

（4） 原文は以下のとおり。

潁州蔣太守在直隸安州遇一老翁。兩手時時顫動、作搖鈴狀。叩其故、曰、余家住某村。村居僅數十戶。山中出一僵尸、能飛行空中、食人小兒。每日未落、群相戒閉戶匿兒、猶往往被攫。村人探其穴、深不可測、無敢犯者。聞城中某道士有法術、因糾積金帛、往求捉怪。道士許諾、擇日至村中設立法壇、謂衆人曰、我法能布天羅地網、使不得飛去、亦須爾輩持兵械相助、尤需一膽大人入其穴。衆人莫敢對、余應聲而出問、何差遣。法師曰、凡僵尸最怕鈴鐺聲、爾到夜間伺其飛出、即入穴中持兩大鈴搖之、手不可住。若稍息、則屍入穴、爾受傷矣。漏將下、法師登壇作法、余因握雙鈴、候屍飛出、盡力亂搖、手如雨點、不敢小住。屍到穴門、果掙掙怒視、聞鈴聲瑯瑯、遂巡不敢入。前面被人圍住、又無逃處、乃奮手張臂與村人格鬥。至天將明、仆地而倒。眾舉火焚之。余時在穴中、未知也。猶搖鈴不敢停如故。至日中、眾大呼、余始出。而兩手動搖不止。遂至今成疾云。

『飛僵』『子不語』卷十二

（5） 原文は以下のとおり。

武林錢塘門內有更樓。僱更夫擊、表裡巡邏。大眾斂貲爲之、由來舊矣。康熙五十六年夏、更夫任三者巡巷外、路過小廟、每至三更、聞柝聲、則有一人從廟中出、踉蹌捷走。漏五下、則先

柝聲入廟、如是者屢矣。任三疑廟中僧有邪約、將伺之爲詐酒肉計。次夕、月明如晝、見其人面枯黑如臘。目眶深陷、兩肩掛銀錠而行、窸窣有聲、出入如前。任三知爲僵屍、因山門之內停有舊櫬、積塵寸許。詢諸僧人。云、其師祖時不知誰何氏所寄厝者也。與儕輩語及之、其中點者曰、吾聞鬼畏赤豆、鐵屑及米子。備此三物升許、伺其破棺出、潛取以繞棺之四週、則彼不能入矣。任如其言、購買三物、待夜二更、屍復出。伺其去遠、攜燈入視、見棺後方板一塊、俗語所謂和頭者、已掀在地、中空空無所有。乃取三物繞棺而密灑之。事畢、逕歸臥更樓上。至五更、有厲聲呼任三爺者。任問爲誰、曰、我山門內之長眠者。無子孫、久不得血食。故出外營求以救腹餓、今爲爾所魔、不能入棺。吾其死矣。可急起將赤豆、鐵屑拂去之。任懼不敢答。又呼曰、我與爾何仇。何苦爲此虐耶。任念與彼解圍之後、彼殺我而後入、何以禦之。終不答。雞初鳴、鬼哀懇、繼以詈罵、久之寂然。明日、過樓下者見有屍僵臥、乃告衆鳴官、以屍還諸棺而火焚之。一方得寧。

(6) 例えば、『認鬼作妹』『續新齊諧』卷十。

(7) 原文は以下のとおり。

紹興王生某、食饌有年。村中富家延之爲師、因屋宇湫隘、適相距里許有新室求售者、逐買使居。且曰、家中摒擋未盡、學徒暨館董輩明晨進館。先生一夜獨眠、能無懼乎。王自負膽壯。且新室也。何畏之有。乃命童攜茗具引至書齋。王周視室內畢、復至門前徙倚。時已夜矣、月色大明、見山下燭火熒熒。趨往視之、光出一白木棺中。王念、此鬼磷耶。色宜碧。而微帶微赤。得無爲金銀氣乎。憶智囊所載、有胡人數輩凶服與櫬而藁葬城外

子不語の僵尸說話の創作性(中野)

者。捕人跡之、櫬中皆黃白也。此棺母乃類是。幸無人、可攫而取也。逐取石塊擊去其釘、從棺後推卸其蓋、則赫然一屍。面青紫而腹膨亨、麻冠草履。越俗、凡父母在堂而子先亡者、例以此殮。王愕然退縮、每一縮則屍一躍。再縮而屍蹶然起。王盡力狂奔、屍自後追之。王入戶登樓、閉門下鍵。喘息甫定、疑屍已去、開窗視之。窗啓而屍昂首大喜、從外躍入、連叩門、不得入。忽大聲悲呼、三呼而諸門洞開。若有啓之者。遂登樓。王無奈何、持木棍待之。屍甫上、即擊以棍。中其肩、所掛銀錠散落於地。屍俯而拾取。王趁其僂偻時、盡力推之、屍滾樓下。旋聞雞啼。從此寂無聲響矣。明日視之、屍跌傷腿骨、橫臥於地、逐召衆人扛而焚之。王歎曰、我以貪故、招屍上樓。屍以貪故、被火燒燬。鬼尙不可貪、而況於人乎。『僵屍貪財受累』『子不語卷十三』

(8) 原文は以下のとおり。

有壯士某。客於湖廣、獨居古寺。一夕、月色甚佳、散步門外、見樹林中隱隱有戴唐巾飄然來者。疑其爲鬼、旋至松林最密中、入一古墓、心知爲僵屍。素聞僵屍失棺上蓋便不能作祟、今夜、先匿於樹林中、伺屍出、將竊取其蓋。二更後、屍果出、似有所往。尾之、至一大宅門外。其上樓窗中先有紅衣婦人、擲下白練一條牽引之。屍攀援而上、作絮語聲、不甚了了。壯士先回、竊其棺蓋藏之、仍伏於松深處。夜將闌、屍匆匆還、見棺上蓋、窘甚、遍覓良久、仍從原路踉蹌奔去。再尾之、至樓下且躍且鳴、啾啾有聲。樓上婦亦相對啾啾、以手搖拒。似訝其不應再至者。雞忽鳴、屍倒於路側。明早、行人盡至、各大駭。同往樓下訪之、乃周姓祠堂。樓停一柩。有女僵屍、亦臥於棺外。衆人知爲僵屍野合之怪、乃合屍於一處而焚之。

中國詩文論叢 第二十九集

『兩僵屍野合』『子不語』卷十二

(附記) 本稿中の「尸・屍」の使いわけは、ほぼ原文に従ったが、
版本による異同については、特に注記しない。